海外留学レポート

海外留学レポート

メルボルン大学 Florey研究所（オーストラリア）

大阪医科大学　神経精神医学　講師
Florey Institute of Neuroscience and Mental Health, Honorary Associate Professor
金沢 徹文

オーストラリアにあるメルボルン大学からCONFIDENTIAL（秘密）と記された文書が届いたのは昨年2017年の4月2日でした。同大学精神科にて招聘准教授（Principle Fellow with the title of Associate Professor）になったので、来なさいということです。

私は大阪医科大学を2000年に卒業後、本学一般消化器外科にて2年間研修医として研鑽を積ませていただきました。学生の頃から精神科に対する興味はあったのですが、なかなか踏み切ることができませんでした。一生続くことなので自分で決めようと考え、研修医終了の時期に思い切って本学の精神神経科に転科させていただきました。現主任教授の米田博先生や同門の先生方に幸運にも温かく迎えていただき、大学病院や市中病院で多くのことを学ばせていただきました。その後研究分野での経験を積むために、米田教授が師事しておられたMing T. Tsuang先生のもとで仕事をさせていただく機会を得ました。Tsuang先生は精神科遺伝学のパイオニア的な存在の大御所で、2005年より1年3ヶ月に渡りカリフォルニア大学サンディエゴ校で先生の指導の元、多くの仕事をすることができました。カリフォルニアの気候にも慣れた頃に私達のラボとよく一緒に研究していた教授から、こっちに移って更に研究を続けないか?と熱心に誘っていただいていました。それが今回メルボルン大学にポジションを作ってくださったIan P. Everall先生です。

Florey研究所の仲間たちと（中央手前が筆者）

結局その当時は日本の臨床や多津屋のダブルカレーが恋しくなり帰国することとなりましたが、折に付けEverall先生とはコンタクトを取り、先生がオーストラリアに移られ、メルボルン大学精神科のヘッドとして活躍していることや、サンディエゴで一緒に仕事をしていた多くの仲間達も同時に移り活発な研究活動を続けていることに正直うらやましい思いを持っていました。日本では帰国後に市中病院の勤務を経て、大学で私達が指導してもらった先生方に少しでも近づいていけるように、また精神科教室が更に発展していけるよう医局長など多くの仕事をしていました。しかし、一方で臨床と教育の合間に研究活動をするのには一定の限界があり、最低限度のアウトプットしか出せていない現状にいくばくかの不全感を覚えていたことも事実です。そんな折に冒頭の手紙がオーストラリア大陸からメールで届きました。

44歳という年齢は何かを変えるには少し手間がかかります。妻には「メルボルンに10月から行くことになったから」とある朝突然伝え、目を丸くされました。教授や精神科の仲間にも伝えたところ、「は〜、この仕事どうすんの?」といった反応が返ってくると思いきや、「ま、半年で帰ってくるんなら機嫌よく行ってきてください。それまでなんとかしておきますんで」と涙が出そうなくらいに嬉しい反応をもらいました。嫁や子どもたちには時間をかけて説明し、正月のメルボルン旅行を約束し、許可を得ることができました。

同地では脳研究に従事させていただきました。精神疾患は病気の原因がまだまだ判明していない挑戦し甲斐のある分野です。結局呼んでくださったEverall先生は、私が渡豪する直前に英国の研究機関に移ることとなり、これまで行ってきた遺伝研究とは全然違った方法論で精神疾患の謎に迫ることとなりました。所属していたのは、Florey研究所という脳研究では世界でも10本の指に入る専門機関でメルボルン大学の中に存在します。新しいグループの立ち上げに協力し、サンディエゴでは経験していなかった研究費獲得といった仕事にも挑戦することができました。たった半年の間でしたが、ポスドクとして見る研究の世界とは違ったレベルの仕事を経験し得たことで、大きな財産になったものと考えています。現在は再び精神神経科で業務を行う一方、メルボルンで培った多くの仲間とスカイプなどでやり取りしながら仕事を進めています。

一定のキャリアを得た研究職の人が、別の分野や方法論で挑戦する期間が大学から保証される制度をサバティカルと呼び、欧米の大学などでは一般的に行われています。幸運なことに私は大学から給料をいただきながら二度目の留学を無事に終えることができました。他学では留学に際して給与がもらえなかったり、ポジションを失ったりといったこともあるようで、本学はそういう意味では非常に恵まれた環境にあるように思われます。この留学に際して大槻勝紀学長、ならびに植木實理事長には一方ならぬお世話をいただきました。伏して感謝いたします。

この留学をサポートしてくださいました多くの先生方、精神神経科の米田教授、康准教授、川野先生、冨樫先生他の皆様に感謝を申し上げます。また、留学前に相談させていただいたチョンクリニックの鄭栄植先生、渡豪後も多くのサポートをいただいた神戸大学精神神経科の先生方や大阪医科大学精神神経科同門会（槻の木同門会）の皆様に感謝いたします。最後にこんな夫に少しの小言だけで付いてきてくれている妻や子供たちに感謝します。